
ありがとうと言える日

平葉陽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとうと言える日

【Nコード】

N8976E

【作者名】

平葉陽蘭

【あらすじ】

平×和です。和葉は友達から新しくオープンしたクレープ屋を教えてもらった。平次とお昼を食べに行く日にそこへも行くことにしたのだが……。そこで平次に悲劇が……！オリキャラも出てきます。

1・まだ何も無い日（前書き）

平×和ですので、関西弁になります。

1・まだ何も無い日

「和葉ア！」

と平次に呼ばれた瞬間、平次に突き飛ばされた和葉は目覚めた。

「何や……夢やったんか。でも何か気味悪いわ」

そう、これは夢だった。

だが、これが現実のこととなり、あんなことになるなんて誰が予想していただろうか……

ミンミンミンミン……とセミが鳴く夏の暑い日。

夏休みに入ってから和葉は合気道部の練習に来ていた。今日も

練習が終わって、2年生のメンバーで帰っていた。

そしていつものようにメンバーの中で和葉と浩子が電車に最後まで残る。駅も2つしか変わらないため、和葉は合気道部の中で浩子と一番仲が良い。たまに遊びに行ったりもする。

「なあなあ和葉。この間、梅田の方においしいクレープ屋がオープンしたらしいんだけど、あさって食べに行かへん？」

「ごめん、浩子ちゃん……あさってもう予定入ってんねん」

「そうなん？　じゃあまた今度行こつか。って言うかひよつとしてその約束、服部君とのやつたりして」

「えっ……」

そう、あさつての約束は平次とだった。それをズバリと言い当てられた和葉は言葉に詰まった。

「やっぱり……。そりゃ服部君との約束は大事やもんな。でもええよな、和葉はそういう人がおって……」

「まるで平次との約束やなかったら断って浩子ちゃんと遊ぶみたいな言い方やん。それにアタシと平次はそんなんとちやうよ。そうや、あさって行くのん梅田やから先行って食べてみるわ。そやから今度の日曜日、一緒に行こう。場所わかつてる？」

和葉は平次から話題をそらした。そして早口になった。そんな和葉を見て浩子は……

「ふふふ……和葉も少しは素直になりや。それで場所やけど、クレープ屋がな、オープンした日チラシ配っててん。それに地図が載ってるから明日そのチラシ持ってくるわ」

「ありがとっ、浩子ちゃん。でも何で浩子ちゃんが梅田にオープン

したクレープ屋のチラシを持ってんの？ 浩子ちゃんバイトしてへんし、梅田でも行ったん？」

和葉は浩子がバイトをしていないことを知っている。だから自分が考えられるもう1つの可能性の方を聞いた。

（でもそれやったら「梅田に行った時にもらってん」って言うような……）と疑問が残ったが。

「それな、お姉ちゃんがこの前、梅田に友だちと遊びに行った時にもらったらしいねん」

「そうやったんや。じゃあ、明日持ってきてな」

少しすると和葉が降りる駅に電車が止まり、2つ先の駅で降りる浩子と別れた。

その日の夕方、和葉は平次の携帯に電話した。

「はい、もしもし。何や？ 和葉」

「あんなあ、あさつてのことやねんけどな。友達にな、梅田にクレープ屋がオープンしたって教えてもろてん。お昼食べんの梅田やろ？ そやからそのクレープ屋も行かへん？」

「別に構^{かめ}へんけど……でもオマエは行く気満々やったんとちゃうんか？ どーせその友達と今度食べに行く約束して、そんであさつてオレと梅田行くから先食べとくわ……って言うたんやろ？」

平次は和葉が言っていないのにズバリと言い当てた。さすが、西の高校生探偵と呼ばれるだけのことはある。

「何でわかったん？ アタシ何も言うてへんのに」

「教えてもらったんやったら一緒に行ったりするやる？ でもオマエはそんなこと全然言わなかった。せやからわかったんや。それより、場所わかってんのか？」

「大丈夫やで。クレープ屋が配ってたチラシ、明日もらうから。それに地図載ってんねん。じゃあ、あさつてはクレープ屋も行くっちゃうーことで」

「せやったら、お昼食べ過ぎんようにせなあかな」
「そやね。じゃあ、あさつては頼んだで」

そして、電話を切った。

その夜、和葉は夢を見た。

どこでだかわからないが、大泣きしている夢を……

1・まだ何も無い日（後書き）

皆様、お久しぶりです。平×和のバレンタイン話を書いて以来、ここから遠ざかってましたね。この話、1ヶ月くらい前〽書こうと思ってたんですが、なかなかまとまりませんでした。時期に多少のズレがありますが、その辺りは……。では次話でお会いしましょう。「元氣のない哀へ・・・」もあとちよつとで11話が完成です。最後の投稿から1年が過ぎるまでにUPしたいと思います。

2・夢が現実になる日

「あの夢、何やったんやろ？ アタシ、どこで何があつて泣いてたんやろ？ しかも何も無い空間で……。2日続けてこんなん、何か気味悪いわ。！ ま、まさかな……」

今日も和葉は合気道部の活動のため、学校に行った。でもあの夢のことが練習中も時々頭をよぎる。それでも和葉はいつも通りにやっているつもりだった。

そして休憩時間になり、和葉たちはいつものように隅に座ってお茶を飲みながらおしゃべりを始めた。和葉もいつもならこの輪に加わるのだが、今日は違った。

和葉は天井をじつと見つめていた。この真上では平次たち剣道部が活動している。竹刀のぶつかり合う音が聞こえる。いつも聞こえているのだが、和葉はいつもより音が大きいような気がしていた。

（いつもこんな音やったっけ……。こんなこと考えてるからそう聞こえるのかなあ？）

竹刀のぶつかり合う音がいつもより大きく聞こえたのは和葉だけのように。

「……………あつた？ 和葉は」
「えっ？」

あんなことを考えていた和葉はみんなの話を聞いていなかったの
で聞き返した。

「『夏休みの宿題で難しそうなんあつた？』って聞いてん。どない
したん？ 珍しいやん、和葉がそんなんって」
「ちよつと風邪引いたみたいで……。それで難しい宿題やんな。
そやな……ザツと見た感じで数学のプリントの最後の方が難しそう
やったで」

その後は和葉も話の輪に入った。いつもより大きく聞こえていた
竹刀の音もいつの間にかいつも通りに戻っていた。

そして、帰りの電車の中でいつものように和葉と浩子が2人にな
ると……

「はい、これ昨日言ってたクレープ屋のチラシ」
「ありがとう、浩子ちゃん」

そして浩子は声を小さくして言った。

「なあ和葉、服部君のことで何かあつたん？ ケンカしたってわけ
やなさそうやけど」

「えっ？」

和葉は驚いた。浩子に気付かれているとは思わなかったからだ。

「休憩時間にみんなとしゃべってて、いつもとちゃうなって思っ
ん。ちよつと考えたら、『和葉がしゃべってへん』って気付いて和
葉の方見たら天井見とったやろ？ しかも何か心配そうね目で。何
かあったんやったら相談乗るで」

「えっ、でもホンマしょーもないことやで。実際に起きるかどう
かわからへんのに」

浩子は「ふふっ」と笑うと言った。

「今まで色んな話してきたやん。真剣な話やしょーもない話も。で
も人に話してスッキリすることやってあんなんで」

和葉は「じゃあ……」という感じで話し出した。

「浩子ちゃんって正夢の経験ある？」

「正夢？ うゝん、そうやなあ……夢の中で食べたメニューが次の
日と同じやったとかやったらあるけど？」

「そっか、実はな……」

と和葉は2日間の夢の内容を話した。

「っていう夢やってん。アタシの考えすぎやろ？」

「そやな……私もメニューが同じやったって言っても完璧に同じや
つたんとちゃうし。にしても和葉はホンマに服部くんのこと好きな
んやね。夢のことやのに、そこまで心配すんねんもん」

「ア……アタシは幼なじみやから心配してるだけやで。あっ、もう

私降りんな」

タイミング良く、電車が和葉の降りる駅に止まるちょっと前のことだった。

そして、平次との約束の日、午前11時半に梅田のビックマンで待ち合わせた2人はお昼をまず食へに行った。その後、本屋などに立ち寄り、それからクレープ屋へと向かった。

店内で平次はポテトサラダ、和葉はチョコバナナのクレープを食べた。店内は和葉たちと同じか、少し上くらいの人たちが多かった。

「結構うまかったな、ここのクレープ」

「そやね。また来ような」

来た道に戻る途中、少し細い通りの横断歩道をちよつと渡ったところ……

「プチッ」

と音がした。

和葉は右足に違和感があったので見てみると、履いていたサンダルひもが一部、根元からちぎれていた。とりあえず、渡ってしまったあと和葉は思った。

平次は、横にいたはずの和葉がいないことに気づき、振り返った。すると……

「和葉ア！」

と平次が和葉に向かって叫んだ。それと同時に和葉は平次に突き飛ばされた。

「平次、何……」

『平次何すんの？』と言おうとしたが、その理由がすぐにわかった。和葉のすぐ横に平次が倒れていた。そして、一台の車が細い道を抜けて走り去って行った。そう、平次は和葉をかばってはねられたのだ。

「平次くいつ！」

和葉の声が一面に響いた。

2・夢が現実になる日（後書き）

1話を投稿してから約1年。ほったらかしにして本当にすみませんでした。あの後、2話目の最後まで結構すぐに書いたんですが、そこで止まってしまつて・・・ストーリーが夏休みの話なので、季節がずれる・・・と私の中でストップがかかっていました。それならそれで、書くだけ書いておけば、今年の夏休みになってすぐ投稿できたのに・・・。

現在、話のストックが全くありませんが、頑張つて書いていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8976e/>

ありがとうと言える日

2010年10月10日05時51分発行